

<論文>

ウラジーミル・ナボコフの翻訳理論と『オネーギン』訳の生んだ波紋

On the Influence of Vladimir Nabokov's Translation of *Eugene Onegin*
and his Theory of Translation on Translation Studies

秋草俊一郎

Abstract

It is widely known that Vladimir Nabokov's "literal" translation of *Eugene Onegin* sparked a heated controversy between the translator and Edmund Wilson. In this translation, Nabokov abolished rhyme and added over a thousand pages of commentary. Yet the iconoclastic translation seems to have been misunderstood. This paper outlines the influence of Nabokov's controversial translation by comparing it with rhymed translations of the poem and by proposing a rereading of Nabokov's essay "Problems of Translation," reprinted in Venuti's *Translation Studies Reader*. Even though his "literal" translation has no successors, the translation's influence on the rhymed translations of *Onegin* has been so profound that those who regard its extreme "literalism" as a failure still had no choice but to consult Nabokov's version. Paradoxically, such critiques have kept Nabokov's translation and translation theory alive even now, 35 years after his death.

1. 序

『ロリータ』で著名なバイリンガル作家ウラジーミル・ナボコフ（1899-1977）によるアレクサンドル・プーシキン『エヴゲーニイ・オネーギン』英訳は、エドモンド・ウィルソンとのあいだに激しい論争を巻き起こしたことで知られている。またナボコフの論文「翻訳をめぐる問題：『オネーギン』を英語に」（1955）は、ローレンス・ヴェヌティ編『翻訳研究読本』のような主要な翻訳論アンソロジーに転載されており、ジャンルの「古典」になりつつある。反面「異化翻訳」の見本のような『オネーギン』訳や、その元になった翻訳観は、その特殊性ゆえ正しく理解されているとは言いがたい面もある。本稿ではナボコフ訳の背景にある理論、特色を「翻訳をめぐる問題」を参照しつつ把握し、ナボコフ訳が生みだした論争、その後の評価を概観しながら、翻訳研究にあたえた影響について再考してみたいと思う。

2. 『オネーギン』翻訳への道

1964年に出版されたナボコフ訳注 Aleksandr Pushkin, *Eugene Onegin: A Novel in Verse* は、ナボコフの「著作」中、最大のヴォリュームを誇っている。全四巻から構成され、一巻が序文と翻訳、二・三巻が注釈と付録、第四巻が索引と原文からなり、総頁数は1600頁を超える。

ナボコフが『エヴゲーニイ・オネーギン』の全訳と注釈を思いついたのは、出版に先立つこと15年近く前にさかのぼる。当時ナボコフはコーネル大学で露文科の教師を務めていたが、講義で用いる文学作品の英訳は悩みの種だった。というのも、ナボコフは当時流通していたロシア文学の英訳のほとんどにたいして不満を抱いていたからだ。

1950年代から本格的な作業に着手したナボコフは、1951年にはグッゲンハイム財団に助成金を申し込むなど出版のために手をまわしはじめ、1953年にはウィルソンに「600ページほどの本になりそう」と書きおけている (Nabokov, 2001: 311)。しかし注釈は膨らみ続け、最終的には1200ページを越えることになる。1958年ごろには作業がほぼ完了し、出版を待つだけになったが、ついに1964年の末に *Eugene Onegin: A Novel in Verse* はスカイブルーのクロス地の装丁、四巻本セットの箱入りというナボコフのほかのどの作品よりも豪華な形でボーリング財団より出版された。

ナボコフは後述するような批判を受けて1966年ごろから翻訳の改訂作業に入り、最晩年である1975年にプリンストン大学出版局から第二版を刊行した。その後一部を省略したペーパーバック版も同出版局から発行されており、現在手に入るのはこの版になる。

3.1. “literal” という概念

ロシア文学の古典として名高いアレクサンドル・プーシキンの韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』は8つの章と断章、総計で約5500の詩行からなっている。その韻文の美しさはしばしば「翻訳によって伝えることは不可能」と評され、日本においても米川正夫、金子幸彦、池田健太郎、木村彰一など錚々たる面々による訳業の存在がその重要性和翻訳の難しさを同時に物語っている。この作品が本国での評価の高さと比べて、国外ではあまり読まれていないのも、その韻文がドストエフスキーやトルストイの散文作品と比べると翻訳では伝わりづらいからとされている。

『オネーギン』のナボコフ訳と、その背景にある翻訳にたいする姿勢が議論を巻き起こしたことはよく知られているが、その翻訳はたんに「忠実な」翻訳とされているふしもある¹。訳者は序文で翻訳をこう定義している。

まず「翻訳」という用語を定義するところから始めなければならない。詩を別の言語に翻訳する試みは以下の三つの範疇に分けられる。

(1) Paraphrasic (パラフレーズ的なもの) ——形式上の便宜ゆえ、省略や付け足しをともなって原文の意識をおこなうもので、この慣例は消費者のせい、翻訳者の無知のせいでおこなわれる。いくつかの言いかえはいきな言いまわしや慣用的な

意識の魅力を持つことがあるが、学者は見栄えのよさに屈服するべきではないし、読者もそれにだまされてはいけない。

(2) *Lexical (or constructional)* (語彙的な、あるいは構造的なもの) ——言葉の基本的な意味(およびその語順)を翻訳すること。優秀なバイリンガルの管理のもとで、機械がおこなうことも可能だろう。

(3) *Literal* (リテラルなもの) ——異なる言語の連想的・文法的な能力に可能なかぎり、原文の文脈に厳密に即した意味を翻訳すること。これだけが真の翻訳である。(Nabokov 1975: 1, xii-xiii)

ドライデンの三類型にならって、ナボコフは翻訳を三つに分類し、そして最後の“*literal*”なもの以外は翻訳ではないと切り捨てている。ここに書かれているように、ナボコフが“*literal*”と定める翻訳は条件が非常に厳しいものであり、日本語で正確な翻訳という意味で使われる「逐語訳」という言葉よりも文脈上での正確さを求めている点でより深みのある概念だ。ナボコフにとって「逐語訳」や「直訳」は次善の策である“*lexical*”にむしろ属してしまう言葉に過ぎない。ここではナボコフの翻訳観を理解するため、あえて訳語をあてずに“*literal*”や“*lexical*”といったタームを使うことにする。

ナボコフの『オネーギン』翻訳を語る上で鍵となるこの“*literal*”という形容詞については、注釈のほかの場所でもくわしく解説されている。

私が解するところの“*literal translation*”は、いささかトートロジー的な用語だが、テキストの本当の意味での“*literal*”な訳文のみが、翻訳と呼べるものなのである。しかしながら、この形容詞にはたぶんここに記しておく価値がある種の含みがあることも確かだ。まず第一に、“*literal translation*”とはただ語や文のもつ直接的な意味だけでなく、暗示された意味への忠実さという含みがある。すなわち、意味論的に正確な解釈であり、(文脈から外れた言葉の意味に関する)“*lexical*”(語彙的)な意味や、(テキストにおける文法的な語の順序に従う)“*constructional*”(構文的な)意味を必要としない。言い換えれば、翻訳とはおそらく、そしてしばしば、語彙的に正確かつ構文的に正確なものだが、文脈に即して正しいとき、そしてテキストの正確なニュアンスと語調を訳出しているときのみそれは“*literal*”なのである。(Nabokov, 1975: 3, 185)

このような翻訳が、訳者に重い負担を強いるだろうことは想像に難くない。ナボコフは「わが“*literalism*”の理想のために真実よりも高く賞される上品なまねごとであるすべてのもの(優美さ、快い響き、明晰さ、よき趣味、現代的な用法、文法さえも)を犠牲にしななければならなかった」と、それを認めている(Nabokov 1975: 1, x)。

3.2. 脚韻からの撤退

ナボコフが犠牲にした最たるものが、「オネーギンの節」と呼ばれる複雑な押韻形式である。これは各節 14 行からなるソネット式の連それぞれが、最初の四行が交代韻 (AbAb)、次の四行が連韻 (CCdd)、次の四行が抱擁韻 (Effe)、最後の二行が連韻 (gg) で構成されるというものだ (大文字は女性韻、小文字が男性韻)。この入り組んだ脚韻が整然と繰り返されるがゆえに、『エヴゲーニイ・オネーギン』は「韻文小説」と副題されているわけだ。

これは後に触れる論争を理解するうえでもポイントになるのだが、ヨーロッパ言語間で詩を翻訳する場合、韻文訳が通例である。そもそも脚韻を用いた作詩が普及しなかった日本とは違い、多くのヨーロッパ言語では脚韻を用いた詩法が一般的だ。また、ロシア語と英語では「音節アクセント詩法」を共用しており、翻訳のさい韻律も保持されることが多い。英語にかぎっても私が確認しているだけで 15 前後の訳が出版されているが、ナボコフ訳をのぞくほぼすべての翻訳で『オネーギンの節』がなんらかの形で再現されている²。

実際、ナボコフも 1945 年の段階では韻文訳で『オネーギン』の一部を訳出していた。この訳は当時親交が厚かった批評家エドマンド・ウィルソンにも好評だったが、ナボコフは韻文訳にたいして早い段階で限界を感じていたようだ。1949 年にはウィルソンに「もう韻を踏んだ翻訳はいっさいやらない——その専制君主ぶりはばかげているし、厳密さと折り合わない」とこぼしている (Nabokov 2001: 254)。

1955 年に発表された論文「翻訳をめぐる問題：『オネーギン』を英語に」で、ナボコフは『オネーギン』を韻文訳することをこう結論している。

こうしたわけで、ここにおいて私が到達した結論は三つ。(1) 『オネーギン』を脚韻つきで訳すのは不可能である。(2) テキストの変調と脚韻を、さらにはもろもろの連想やすべてとそのほかの特徴すべてを、一連の脚注で記すことは可能である。(3) 『オネーギン』の各連 14 行の脚韻を踏んだ四歩格を 14 行の、脚韻を踏まない、長さのばらばらな、二歩格から五歩格の弱強格に置きかえることでまずまず正確に翻訳することは可能である。(Nabokov 1992: 143)

訳注の序文でもナボコフは「脚韻を再現しながら、すべての詩を“literally”に訳するのは数学的に不可能」と断定し、脚韻からの撤退を表明する(Nabokov 1975: 1 ix)。

ただし注意しなくてはならないのは、ナボコフは脚韻からは撤退したが、韻律は手放さなかったという点だ。その理由をナボコフは「英語散文はごく自然に弱強格になるという奇妙な理由で、弱強格の詩行はリテラルな正確さとまったく自然に結合するのだ」と説明している (Nabokov 1992: 135)。実際『オネーギン』英訳で、ロシア語の弱強格はかなりの程度保たれている。

3.3 『オネーギン』訳の実態——対比を通して

ここで、ナボコフの訳の異質さを、ほかのいくつかの英訳と対比して見ていくことにしよう。紙幅の都合もあり、とりあげるのは第1章34連の5-12行とする。ここは語り手である詩人がプーシキンに前節に続いて、女性の美しい足をめぐり記憶に心悩ませられる箇所だ。原詩では連韻(CCdd)と抱擁韻(Effe)の組み合わせで書かれている。まず、原詩とその逐語訳を並べてみる。

Опять кипит воображенье,	またもや空想は沸きあふれ、
Опять ее прикосновенье	またもやその感触は
Зажгло в увядшем сердце кровь,	しぼんだ胸の血の中で燃えあがり、
Опять тоска, опять любовь!..	またもや憂愁、またもや愛!……
Но полно прославлять надменных	だが高慢な人々を賛美するのは沢山だ
Болтливой лирою своей;	自分の饒舌な豎琴で。
Они не стоят ни страстей,	彼らは情熱に値しない、
Ни песен, ими вдохновенных:	彼らに靈感を吹き込まれた歌もそうだ。

(Пушкин 1975; 20-21)

1945年時点でのナボコフの訳文はこうだった。

again to build mad builders start;
 again within a withered heart
 one touch engenders fire; again
 --the same old love, the same old pain....
 But really, my loquacious lyre
 has laughed haughty belles too long
 --for they deserve neither the song,
 nor the emotions they inspire:(Nabokov 1945: 39)

脚韻が保持されているが、その一方で“again to build mad builders start”の一行は原文とはかなり違うし、「賛美する прославлять」が“laugh”になってしまったりしている。他方で“Болтливой лирою”を“loquacious lyre”と訳すなどロシア語の頭韻を英語でも再現しようと試みている。

1964年版では脚韻は廃されて以下のような訳文になっている。

Again imagination seethes,
 again that touch has kindled
 the blood within my withered heart,

again the ache, again the love!
But 'tis enough extolling haughty ones
with my loquacious lyre:
they are not worth either the passions
or songs by them inspired; (Nabokov 1964: 1,112)

意味的にはほとんど原文と等しいのがわかると思う。5行目“extol”は正確だが、後掲する他四人の訳者が“praise”または“overpraise”を使っているのと比べると文語調に響く。これを改訳したのが以下の1975年版である。

Again imagination seethes,
again that touch
has fired the blood within my withered heart,
again the ache, again the love!
But 'tis enough extolling haughty ones
with my loquacious lyre:
they are not worth either the passions
or songs by them inspired; (Nabokov 1975: 1,110)

2-3行目の“again that touch has kindled/the blood within my withered heart,”が“again that touch/has fired the blood within my withered heart,”になっている。これにより、原文と厳密に行ごとに対応するようになった。そのかわり2行目は極端に短くなってしまっている。原文との対応を求めれば求めるほど、訳文は詩から離れざるをえなくなるわけだ。このように三つ並べるとナボコフ訳がなにを目指しているのか明快になる。

それではほかの韻文訳はどうなっているのだろうか。ここではナボコフが論難したドイツ語、アルント訳および、ナボコフ以降の英訳で有力と思われるジョンストン、ファーレン訳を用意した。

ドイツ語訳
Again imagination's kindled,
The heart that thought its fires had dwindled
Flames up, the embers glow again
With sudden passion, sudden pain. . .
But in their praises why be stringing,
Anew the garrulous fond lyre?
The haughty creatures may inspire
Our songs, but are not worth the singing. (Deutsch 1943: 15)

余計な語 “fond” “anew” が使われていたり、「また *опять*」のかわりに “sudden” が使われていたりしている。「情熱 *страсть*」に対応する語がないなど省略もある。

アルント訳

And still from these bewitching touches
Imagination seethes, clutches
The withered heart with fire again
Once more in love, once more in pain! . . .
But silence now—the garrulous lyre
Has praised those haughty ones enough;
In vain the odes which they inspire,
In vain the transports, which they scoff! (Arndt 2002: 20)

“silence” “now” といった単語レベルだけでなく、“which they scoff!” のように節レベルでの挿入がおこなわれている。

ジョンストン訳

fancies once more are hotly bubbling
once more that touch is fiercely troubling
the blood within my withered heart,
once more the love, once more the smart. . .
But, now I’ve praised the queens of fashion,
enough of my loquacious lyre:
they don’t deserve what they inspire
in terms of poetry or passion-- (Johnston 1979: 23)

“hotly” “fiercely” “now” など挿入された語がめだつ。また “queens of fashion” が「高慢な人々 *надменные*」の訳語なのはどうか？

ファーレン訳

Once more imagination surges,
Once more that touch ignites and urges
The blood within this withered heart:
Once more the love. . .once more the dart!
But stop... Enough! My babbling lyre
Has overpraised these haughty things:
They’re hardly worth the songs one sings

Or all the passions they inspire; (Falen 1990: 20)

「憂愁 *toska*」が“*dart*”に。“*urges*”“*stop*”など余計な語も挿入されている。

ほかの四つの訳は脚韻を再現するために、程度の差こそあれ、内容を犠牲にしているということがわかる。こうしてナボコフ訳をほかの韻文訳と引き比べてみると、その対応性が際立つ。

研究者ブライアン・ボイドはナボコフ訳が論争を生んだのは、それが当初の予定——ロシア語のオリジナルとの対訳（原文の行間に英訳がくるといふ）——から外れたせいであり、「いつの日かナボコフ訳がこの方式で出版されれば、原文でプーシキンを知りつつなお、韻文訳をナボコフの妥協なき“*literalism*”よりも好むすべての評者が自分の評価を取り消すだろう」としているが (Boyd 1991: 330)、それも十分うなずける話である。

3.4. 訳文と注釈

このように厳密に翻訳するだけでなく、いくつかの単語についてナボコフは注釈をつけてフォローしている。4行目の“*toska*”という語だが、この単語ひとつについてもナボコフは次のような詳細な注釈をつけている。

“*toska*”の含む陰影を伝える一語の英語はない。それはもっとも深く、もっとも痛ましいところでのすさまじい精神的な苦悩の感情であり、しばしば特定の原因なしにおこる。より病的ではないレベルでは、それは魂のにぶい疼きであり、切望するものなき切望であり、病的な思慕であり、漠然とした所在無さであり、精神的な苦悶であり、熱望である。ある場合にはある特定の誰かや、何かにたいする欲望や、ノスタルジアや恋煩いになるだろう。一番低いレベルではアンニュイや退屈、“*skuka*”といった言葉になる。副詞の“*toskliviy*”は“*dismal*”や“*dreary*”といった言葉に翻訳可能である。(Nabokov 1975: 2, 141)

上記に見られるように、細心の注意を払って訳したうえでなお翻訳に入りきれない部分は、紙幅を割いてあますところなく読者に説明しようとしている。注の内容は語のニュアンスから文学的アリュージョン、伝記的情報などさまざまに長いものになると 10 頁前後にもなることがある。

前掲した翻訳についての定義で、ナボコフは「“*literal translation*”とはただ語や文のもつ直接的な意味だけでなく、暗示された意味への忠実さという含みがある」としていた。ただし、原詩のニュアンスを伝えるには訳文だけでは限界がある。ゆえに注釈が活用されることになるわけだ。むしろ、ナボコフの“*literalism*”の実現のためには注釈は欠かせないものだった。

それゆえこの膨大な注釈は翻訳の一部として、訳文とパラレルに読まれるべきものだ³。英訳がロシア語原文の対訳か、上に示したような行ごとの対応を意識させる方式で発表さ

れる予定であったように、注釈もまた当初は脚注として英訳の下の段に組みこまれるはずだったことを忘れてはならない。先述した「翻訳をめぐる問題」の有名な一節に、「私はおびただしい脚注を添えた翻訳を、摩天楼の如く頁の最上部にまで達せんと伸びた、^{コメントリー}注釈と^{エターニティ}永遠の狭間に原詩のただ 1 行のみを輝かせている脚注を求めているのだ」というものがある(Nabokov 1992: 143)——つまり、通例頁の下方に押しこめられている脚注が、その足をどんどん伸ばしていき、最終的には高層ビルのようにそびえたち、原詩はたった一行になってしまう——奇怪なイメージだが、それこそが詩への最大の敬意の払い方なのだ、とナボコフは言うのである。

こうした注釈のあり方を、後述するスタイナーのように裏方である注釈者が原文を押しつけて前面に出ているとして批判的にとらえる論者もいる。ただし、私たちはこの四巻組みの書物が、一冊のプーシキン著の韻文小説の翻訳と三冊のナボコフ著の注釈と索引ではなく、あくまで Aleksandr Pushkin, *Eugene Onegin: A Novel in Verse* として提示されていることを忘れてはならない。

3.5. ナボコフの翻訳観

いままでの議論を踏まえると、ナボコフの翻訳観も見通しが立ちやすくなるのではないだろうか。それはよく言われるような「逐語訳」のようなものではない。正確さを追求する、といっても、起点言語のニュアンスを（訳者が把握する範囲で）可能な限りくみとった上で、それを目標言語で再現するのだが、そのさい、“extol”で見られたように目標言語でその言葉がかなり異化的でも使用する。あるいは原語ではなにげない言葉にたいして過剰な注釈をつけるということもおこる。そのため、完成した訳文は原文に比べてかなり難しく感じたり、本文の何倍もの長い注を読まなくてはならないといったことがおこる。

これはナボコフの文学観も関係している。「翻訳をめぐる問題」でナボコフはこう書いている。

訳者はたえずテキストの基本的パターンだけでなく、そのパターンに織りこまれている借用表現にも心をとめなくてはならない。脚韻や韻律のために、なにものも加えられることがあってはならない。特殊な制限付きルール（特定の駒しか使ってはならないといったような）が適用された作図コンテストにおける課題付きチェス・プロブレムを考えるとよい。奇跡的にむだのないオネーギン・スタンザにおいても、用いる駒は数も種類も厳しく制限されるだろう。それらの駒を翻訳者があちこち移しかえることは許されるかもしれないが、追加の駒が、詰め物や穴埋めに足されて独創的な解を損なうようなことは許されない。(Nabokov 1992: 142)

ここでは翻訳が「チェス・プロブレム」——ナボコフが愛好したチェスを用いたパズル——にたとえられている。ナボコフにとって文学作品とは一種の高度なパズルのようなもの

にうつっていた。ここでいう「パズル」とは、ある特定のルールの下に、作者の意図を実現するためのものだ。ところが詩、それも『オネーギン』のような複雑な形式——厳しいルールを持ったものの場合、パズルをパズルのままほかの言語にうつすことは不可能なのだ。それはチェス・プロブレムを詰め将棋に訳すようなものだったのかもしれない。チェスと将棋は同じルーツをもつゲームだが、ルール（文法）も違えば、駒の働き（語彙）もちがう。チェスのポーンは将棋の歩と似ているが、ルール中での動きや働きは異なる。

こうした状況でどうパズルを再現するのか。それがナボコフの翻訳観の根っこにあるものだと言ってよい。ただし、ここでいう「パズル」のルールが、あくまでナボコフ自身から見てのものであるということには注意をはらう必要がある。つまり、異化的な訳語の選択や、長大な注釈にしたところで、それはナボコフという個人の目に映っているものという側面が強い。ナボコフには『オネーギン』がロシアの一般読者にどう映っているか、あるいは自分の訳文が英語の一般読者にどう映るだろうかなどということとはなから眼中にない。そのため、必然的に読者には負荷がかかることになる。ナボコフは自作の小説の英訳のまえがきで「ペダント万歳！『精神』さえ訳せればすべてよしと思っているまぬけどもはくたばれ」と書いているが (Nabokov 1989: 7)、それもこういった文脈で理解されるべきものだろう。

自己翻訳の場合は、作者＝訳者ナボコフは自分で作ったパズルのしくみを当然ながら熟知している。そのため、一部をそれとなく改変することでパズルを移植できる。ただし『オネーギン』のように他人の手によるもので複雑な形式をもつ作品の場合、パズルを移植することが不可能なのでそのかわり、ナボコフ自身が感知するところのルールを正確に、すべて記述する必要にせまられる。そのため訳文は生硬になり、注釈は膨らむのである。

この点を理解しないと、ナボコフの翻訳は忠実であるとか、自己翻訳は変更が多いがそうでない翻訳は変更が少ないなど、そういった表面的な理解で終わってしまう危険性がある⁴。

4.1. 書評に見る出版当時の反応

当時アメリカでのナボコフの文名は『ロリータ』、そして 1962 年に発表された『青白い炎』によってピークに達していたから、この訳書はその内容が専門的なものだったにもかかわらず（またその価格からして多くの読者が購入するとは考えにくかったにもかかわらず）、各誌で書評が掲載され、賞賛と非難の声がともに寄せられた。ここではその毀誉褒貶を当時の書評に見てみよう。

好意的なものとしては科学者ネイサン・ローゼンによる「彼の網羅的な『オネーギン』の分析は、あらゆる言語で書かれたものなかでもっとも詳細で価値あるものであり、実際魅了的である」という賛辞や (Rosen 1968: 25)、小説家アンソニー・バージェスの『オネーギン』注と『青白い炎』との類似に「彼は批評の道具を新たな美の手段にした——まず『青白い炎』で、そして『エヴゲーニイ・オネーギン』の二巻と三巻で」として触れながら賞賛したものがある (Burgess 1965: 74)。批評家ジョン・ベイリーは「ナボコフのヴァー

ジョンはあまりに繊細で、それ自体が詩として独自の価値をもっている——皮肉なことにそれはプーシキンのものではないが。だが、それはこれ以上ないくらいそれに近いものだ」と高評価を与えた(Bayley 1964: 26)。詩人ジョン・ウェインは「すばらしい。それはナボコフが文章を書くときの流儀である、趣きと細やかさの両方をそなえており、読者の注意を、原文がそれを幸運にも読むことができる人々にたいしてそうにちがいないように、しっかりととらえて離さない」と評した(Wain 1965: 629)。ロシア文学者トーマス・ショウは専門的な立場から「これらの注釈はプーシキンのほかのどんな作品やほかのロシア人の手によって書かれたいかなるものよりもはるかに優れている」と論評し、他方で翻訳については「英語をもとにした自分自身の言語」で「挑戦的」に書かれており、条件的にはあるが正確さにおいて有用であるとした(Shaw 1965: 115)。ロシア文学者アーネスト・J・シモンズの「正確な英訳ということでこれに比肩しうるものはないし、注釈はロシアのいかなるものよりもよい」という絶賛もよせられた(Simmons 1964: 4)。

ナボコフ訳に賛辞を送った評者たちの一致した見解は①訳が正確である②注が詳細である③作家ナボコフの「作品」として独自の価値を持つ、というものであった。

他方、辛辣なものも多くあった。詩人ロバート・コンクエストは「プーシキンを私たちの前に連れてこようという試みがどれも潰えたことは悲しむべきだ。全体を通してこれは英語への翻訳というよりも、あまりにナボコフ詩への置き換えである」とした(Conquest 1965: 238)。ロシア文学者シドニー・モナスは「ナボコフはそこでは精神が死に絶え、ただ文字のみ生き残るプロテスタント的、原理主義的な“literalism”に達してしまったように見える」と批判した(Monas 1965: 599)。ガイ・ダニエルズは、ナボコフによる自らの翻訳を「あんちょこ pony」として使ってくれという発言を受けて「ナボコフ氏のポニーは飛節内腫をもらっていることがわかった」と皮肉った(Daniels 1965: 21)。ロシア文学者モーリス・フリードベルクは「ナボコフの翻訳は面白いが、読者をひきつけ、のめりこませるものではない。[中略]彼の『エヴゲーニイ・オネーギン』翻訳は成功とはみなしがたい」と結論した(Фридберг 1964: 297-300)。

批判者が指摘している共通した特徴は、①ナボコフ訳の読みにくさ——特に見慣れない単語の使用、②その訳文が脚韻を踏んでいない、という二点に集約できる。しかしナボコフにしてみればこうした反応は想定範囲内にとどまるものだったので、「私の『エヴゲーニイ・オネーギン』は理想的なあんちょこには不足だったようだ。これはもっと原文に近づけてもっと醜くする必要がある」と述べて相手にしなかった(Nabokov 1990: 242)。

4.2. ウィルソンとの論争

批評家であり、小説家であり、なによりもナボコフの友人であった——一時期はプーシキンの戯曲を共訳するほどの信頼関係を築いていた——エドモンド・ウィルソンも長文の書評をよせた。ウィルソンは「知露派」としても知られ、ロシア語の学習経験もあり、ロシア文学の教養も人並み以上にもっていたため、書評は必然的に熱を帯びることになった。

ウィルソンもまた訳文が脚韻を踏んでいないこと、英語が読みづらいことを指摘した。「ぎくしゃくして時には陳腐なこの翻訳に認められる唯一ナボコフらしい特徴は、めったにしか見られぬ訳語を使用する癖である」、そして「彼は、プーシキンを単純・平板化し、自分自身の力を十分に発揮する機会を否定することによって、読者と自分自身の両方を苦しめようとしたのではないかと思えてくる」と評した(ウィルソン 2005: 266)。

ウィルソンは英語の読みづらさのほかに、ナボコフによる『オネーギン』解釈への批判、さらにはロシア語もとりまちがえているのではないかと、かなり踏みこんだ批判もおこなった。さらにウィルソンの書評には、ナボコフに対する個人的な攻撃ともとれる文章も含まれていた。

それにたいし、ナボコフは公開書簡で反論しているが、ウィルソンのロシア語についての指摘に的を絞ったうえでその無知を批判した。そして「おおげさな落ちつきと不機嫌な物知らずのまぜこぜは、プーシキンと私の言葉の意義のある議論に、なんら貢献するところがないのである」として (Nabokov 1989b: 377)、したたかに打ちのめした。こうしたやりとりは、言うまでもなく、ほぼ四半世紀のあいだつちかかってきた二人の友情を決定的に損なってしまうことになった。

今の目から見れば、ウィルソンの意見にももっともな点がいくつもあったのだが(プーシキンの語学力、難語の使用、英詩への無理解)、そうした正しい主張までも、ウィルソンのロシア語の知識の不正確さがナボコフの指摘によって暴かれてしまうと、説得力を失ってしまった感は否めない。

当時、アメリカでもっとも有力な評論家だったウィルソンとの論争は数誌にまたがる応酬という形で展開し、ひろく人々の耳目を集めた。ベストセラー作家と有名評論家の「公開おおげんか」は、韻文翻訳について読者の意識を向けることになった⁵。

4.3. ゲルシェンクロンの批判

ウィルソンと並んで、早い段階でまとまった量の分析と批判をナボコフ訳によせたのが、アレクサンドル・ゲルシェンクロンだった。このロシア生まれのハーバードの経済学者は、文芸批評は余技だったにもかかわらず、確かな目でナボコフの『オネーギン』の長所と短所をあげている。彼によればナボコフ訳は正確だが、自分の翻訳を唯一無二のものだと言うのはいただけない。なぜなら「翻訳とは距離と地域か、距離と角度か、地域と角度かのいずれかひとつには忠実であっても、その三つすべてをあらわすことができぬ地図に少し似たところがある」からである(Gerschenkron 1966: 337)。また訳語についても、ナボコフが指摘するプーシキンの数多くのガリシズムは、時間の経過とともに「言葉や句の持っていた価値や含みは微妙なものになり、それが異国からきたという感覚が失われていくという『ロシア化』の過程の影響を受け」たことを考慮の外に置いているという(Gerschenkron 1966: 338)。文章語の成立が遅かったロシア語の場合、その過程でフランス語の語彙の影響をうけているが、ナボコフはそうした語を英語に移す上で、英語でもフランス語起源の語やフランス語そのものに置き換えるという傾向があり、それがナボコフの

英訳が読みづらい原因のひとつになっている。しかし、あるロシア語がフランス語に由来する、フランス語の用法を意識したものだとしても、それを単純にフランス語に訳すのは危ういというわけだ。

注釈の最大の特徴であるナボコフが指摘するおびただしいヨーロッパ文学のアリュージョンについては、その中には明確に証明できないものや明らかに関係のないものが含まれているとも指摘している。このようなゲルシェンクロンの批判は、ナボコフ訳の抱えている本質的な問題を突いたものも多い。ゲルシェンクロンが指摘した間違いのいくつかは1975年版で改訂されていることから、その信憑性がうかがえる。

4.4. 翻訳家たちとの論争

『オネーギン』をめぐる論争は、批評家や書評者たちだけではなく、ほかの英訳者たちとのあいだにも巻き起こされた。注釈でナボコフは、詩人バベット・ドイチュが夫のスラヴィスト、ヤルモリンスキーの協力をえて完成させた1943年の英訳をとりあげて誤訳を批判した。ナボコフの『オネーギン』の出版直後、ドイチュからの書簡が『ニュー・ステイツマン』誌に掲載されたが、ナボコフはそれを「意識とオリジナルの関係は夢と現実の関係に似ているが、ドイチュさんの翻訳は悪夢というほかなし」と切り捨てている(Nabokov 1965: 642)。

さらにナボコフは「クラヴィコードをポロポロと」と題された文章で、同じボーリング財団の援助を受け出版されたウォルター・アルント訳を詳細に分析して批判した(Nabokov 1990: 231-240)。アルントも同じ雑誌で返答したが(Arndt 1964: 16)、この時点では肝心のナボコフ訳のほうがまだ出版されていなかったため、ナボコフに一方的に非難されるだけで終わってしまった。その後、アルントは編者を勤めたプーシキン作品集の序文で、ナボコフ訳を「悲しい儀式的な殺人が、ナボコフの第一巻において飽くなき語彙的死体愛好の目的のためになされた」と酷評しかえし、「彼は貴重な形式をあきらめ、読者を注釈の山に棒で追い立ててしまった」とし、脚韻を廃したナボコフ訳のほうが「パラフレーズ」だと皮肉っている。この文章でアルントは「目標言語において詩をつくること目標は、オリジナルによって同時代の読者に生みだされる効果の全体を可能な限り、まねることである」と自分の翻訳観と述べているが(Arndt 1999: xxviii)、これがナボコフの“literalism”とはまったく異なるものであることは明白だ。二人の翻訳の議論は最初からまったくかみ合わないものにならざるをえなかったのもしかたがないところだろう。

翻訳論争はナボコフ死後もむしかえされた。1977年——ナボコフが死去した年——にチャールズ・ジョンストンによる『オネーギン』新訳が出版された。ジョンストンは「訳者前書き」で「ウラジーミル・ナボコフの無韻のヤンプへの訳文は正確な意味を再生産したが、明らかにそれ以上の野望を放棄してしまった」と批判的な立場をとっていた(Pushkin 1979: liv)。それに対し、ナボコフの息子、ドミトリー・ナボコフが反論するということが起こっている。1982年に『タイムズ文藝付録』誌上で書簡の形をとっておこなわれたこの「代理戦争」はドミトリーの「ナボコフと訳して」というエッセイにまとめら

れているが、ここでも議論の主な焦点になっているのは、ナボコフの採用した見慣れない単語だった。ドミトリーは父とまったく同じように、その正確さをたてに辞書を持ち出して反論している(Nabokov 1979)。こうした「代理戦争」からも、死後なお続くナボコフ訳がうんだ波紋の大きさがうかがえる。。

5. 研究と評価

前節で概観したような論争をへて、現在この翻訳と注釈の評価はどう定まってきているのだろうか。本稿ではとりわけ翻訳研究というジャンルのなかでどう扱われてきたのかを中心にみていくことにしたい。

ナボコフは生涯に少なからぬ翻訳を実践しただけでなく、翻訳についてのエッセイも残したが⁶、それはのちに『翻訳の理論：ドライデンからデリダまでのアンソロジー』(1992)や『翻訳研究読本』(2000)といった翻訳論アンソロジーに再録されている。こうした扱いの背景には、翻訳にかかわった作家、思想家は多いが、ナボコフのように学究肌で、自分のとった手法を擁護するためにまとまった論文を著したものがあまりいないこともある。作家の翻訳にもいくつかパターンがあるが、エズラ・パウンドをひとつの典型とするような、自分がほとんどできない言語の作品を大胆に意識して創作の糧にした作家とは、ナボコフは好対照をなしている。さらに、これほど真っ向から妥協なき異化翻訳を理論的に擁護したものはめずらしいという事情もあるだろう。比較的最近出版された大部の『翻訳——理論と実践』(2006)も、ナボコフの翻訳観の変遷についてページを割いてとりあげている。

もちろんエッセイだけでなく、ナボコフの『オネーギン』訳とそれがもたらした論争は、翻訳研究史の観点からも重要であり、概説書などにも少なからず記述がある場合が多い。しかし、そのとりあげられ方は必ずしも好意的なものとはかぎらない。

たとえば、1971年のペン・アメリカンセンターが刊行した論集『翻訳の世界』で、ヘレン・マチニクはナボコフ訳をほかの英訳と比較して、「熱烈な献身と深い理解から、入念に、理想主義的にナボコフはプーシキンを殺害した——驚くべき文学的犯罪である」と批判している(Muchnic 1971: 303)。

ジョージ・スタイナーは浩瀚な翻訳論『バベルの後に』で、ナボコフを翻訳を本質的に不可能なものだとみなす「単子主義者」として紹介している。また、スタイナーは「訳文と註記とを同時に勘案すれば、ナボコフの作品はバロック調の機知と学識を兼ね備えた傑作である、と言ってよい。私の提起した解釈学のモデルに拠れば、ナボコフの『プーシキン』は、<補償のしすぎ>、<過度の補償>の実例である。この作品は、原作をミドラシ風に再生し、掘り下げたものであって、その仕方たるや、規模は大きく方法は巧妙であり、作者が意図したか否かは別にして、結果としては原作に敵対するものとなっている」とし(スタイナー 2009: (7))、否定的に扱っている。

ロシア語圏の翻訳研究に従事するローレン・ライトンはソヴィエトとアメリカの文芸翻訳をめぐるモノグラフ『二つの世界、ひとつの芸術：ロシアとアメリカの文芸翻訳』において、いくつかの『オネーギン』英訳を比較したうえで、ナボコフ訳を異端視している。

アルントとジョンストンの過ちは彼らが最善を尽くした結果であり、彼らの不器用な言いまわしは翻訳全体の評価を定めるものではないが、念入りで大仕掛けなナボコフの文法構造の“literal”な複製品は、脚韻をもった詩行を作れなかった手抜きを弁解しているだけと見てよい。ナボコフの翻訳はより安易な仕事だったことは疑う余地はない。(Leighton 1991: 192)

ソ連・ロシアの翻訳研究は 60 年代までは西側諸国よりもむしろすすんでおり、活発な議論がおこなわれていたことで知られている。そのテーゼのひとつは「原文から読者が受けるのと同じ効果を、訳文から読者が受けることができるように訳すべし」というものだったが、その立場からは、ナボコフ訳は低く見積もらざるをえなかったのだろう。

ナボコフ訳へのアンチの最右翼とでもいえるべきものが、『ゲーデル、エッシャー、バッハ』で日本でも有名な数学者ダグラス・ホフスタッターである。その韻文翻訳をめぐる大著『マロのはかなき調べ』で、ホフスタッターはナボコフ訳のリズム感のなさを徹底的に批判した。ちなみにホフスタッターは『オネーギン』好きが高じて、後にロシア語を習得して自力での韻文訳に挑んだが、その序文でも「ナボコフと自分自身を比べれば、実際、自分は天才的な翻訳家だとわかる」とまで言っている(Pushkin 1999: xxxi)。ホフスタッター訳の特徴を一言でいうなら、極端なまでの「韻文主義」である。ナボコフが意味のために脚韻を犠牲にしたように、ホフスタッターは脚韻をすべてに優先させている。

参考までに、実際に 3.3 で比較対照した第 1 章 34 連の 5-12 行のホフスタッター訳をあげておく。

Once more my fantasies start swarming,
 Once more my heart, once touched, starts warming;
 My wilting core refills with blood:
 Once more she's mare, once more I'm stud!
 But stop! Why should my babbling lyre
 Waste words on all these haughty dames?
 They don't deserve the raging flames
 Or raving songs that they inspire. (Pushkin 1999: 11)

このようなホフスタッターの訳文はよく言えば音楽的・リズムカルだが、うがった見方をすれば自分の才気走った思いつきを誇示するために原詩を利用しているだけに見えなくもない。実際、その訳文はロシア語能力の不確かさゆえ、専門家には不評である。

ナボコフ訳の影響の大きさは、このような過剰ともいふべき反応を生んでしまったところにもうかがえる。現段階で、ナボコフ訳とホフスタッター訳を両極——散文訳と韻文訳——にとるスペクトルに、ほかのほぼすべての『オネーギン』英訳はふくまれてしまうと言っていいただろう。

比較文学者デイヴィッド・ダムロッシュによる『世界文学とは何か?』は「世界文学」の入門書というだけでなく、一種の翻訳論としても読むことができる。その第四章でナボコフの『オネーギン』訳についての言及がある。

逐語訳に取りくんだ者もいたが、その訳文は、原文の特質を忠実に伝えようとするあまり、読むに耐えるものではなかった。こうしたアプローチの行きすぎた実践として挙げられるのが、ナボコフによってぎこちなく訳され、途方もない注釈を付けられた『エヴゲーニイ・オネーギン』だ。(ダムロッシュ 2003: 243)

著作中でダムロッシュは同化的な翻訳を退け、異化的な翻訳こそが受け入れ側の文化を豊かにするとして推進すべきであると提言している。しかし、その観点から見ても、ナボコフ訳は「行きすぎ」であるという評価になってしまう。起点言語の文化は尊重すべきだが、目標言語において文学作品として最低限成立していなくては「世界文学」としての価値はない、というわけだ(ただし、ダムロッシュはナボコフ訳についてあまり理解していないようだ)。

このように現在でも、ナボコフの『オネーギン』訳は一種の「際物」として——やりすぎた異化翻訳の例としてやり玉にあがっている。ただ彼らは自分たちの擁護する翻訳が、ナボコフほどの正確さを達成できなくてもよい十分な根拠を提出できていない。脚韻を踏んだ翻訳を 5000 行以上通そうと思えば、かならず余計な語を挿入したり、意味を変えたりしなくてはならなくなる。どの程度までなら脚韻のために詩の内容に手を加えてもいいのかの明確な基準はない。

他方、ナボコフの翻訳理論をより正確に把握し、それがどの程度適切に実行されているか調査する研究も 90 年代以降でてきている。ジャドソン・ローゼングラントはナボコフの『オネーギン』の翻訳理論を分析した有力な研究のなかで、その理論の方向性の正しさを評価しながらも、実際にはナボコフの訳文はプーシキンのそれに比して「文体的なモチベーション」が欠けているとし(Rosengrant 1994: 21)、こう結論している。

ナボコフの“literalist”としての努力が台無しになっているのはいくつかの基本的な方法のせいというよりも、どんな理由があるにしろ、彼自身それを一貫して高いレベルでは維持できず、自分自身の厳粛だが高貴な目標を彼自身つねには達成できていないせいである。それゆえ、彼の『エヴゲーニイ・オネーギン』が翻訳の不完全な失敗とみなされるべきなのは、(多くの人々が指摘するように)その

“literalist”の理論がやりすぎなのではなく、彼がそれを十分に実行できなかったことにある。(Rosengrant 1994: 25)

リューバ・タルヴィの資料的な論文はある意味でローゼングラントの結論を裏付けるものになっている。彼女は論文の中でナボコフの翻訳が『オネーギン』の原文を「文節の長さ」・「韻律」・「意味」・「文法」の4つの基準において完璧に複製しているかどうか行ごとにチェックしている。その結果、完全なクローニングが達成されているのは、全5523行のうち、1975年の改訂版でもわずか3.8パーセントの213行しかないという(Тарви 1999: 313)。つまり、ナボコフの長年にわたる精力的な努力をもってしても英語とロシア語のあいだには乗り越えがたい言語的・文法的な障壁(冠詞・主語・動詞の有無、単語の平均的な音節の違い)が多かったということだ。これは(多くの評者が指摘したように)ナボコフの訳業が決して機械的にできるようなイージーなものではなかったことを逆説的にしめしている。

6. 結論

結局、ナボコフの翻訳がもたらしたものはなんだったのだろうか。ナボコフは「翻訳をめぐる問題」で「読みやすい」翻訳にたいする怒りを表明し、その末尾を「脚注と、去勢も水増しもなしの完全に“literal”な意味が欲しいのだ——私はそうした意味とそうした注を、『詩的』な訳文の中でいまだ息もたえだえになり、脚韻によって汚され辱められたすべての外国語の詩のために欲しいのだ」としめくくっているが(Nabokov 1992: 143)、ナボコフ以降の『オネーギン』英訳にナボコフのような散文訳はひとつもない——いまだに詩の翻訳は脚韻に「汚され辱められた」ままである。そういった意味ではナボコフ訳は成功したとは言いがたい。

私見ではナボコフ訳にフォロワーがでなかったのは、その訳の精度が高く、注釈があまりに充実していたことが原因ではないかと思う。ナボコフ訳は“literalism”の理想をつきつめた。しかし、後続の訳者から逆に異化翻訳へのモチベーションを奪ってしまったのではないか。ナボコフ以上に正確な訳文を作成し、ナボコフ以上の注釈を積みあげるのは至難の業だからだ。他方、韻文訳はどうしても不完全なものにならざるをえず、それゆえヴァリエーションが次々にでる余地が生まれる。

しかしナボコフ訳が、詩の翻訳は詩であることがあたりまえだった当時の常識に挑み、議論を喚起したのはまぎれもない事実である。ナボコフ流の散文訳は採用されることはなかったが、後続の『オネーギン』訳者たちは、反発するにしろ、参考にするにしろ、なんらかの形でナボコフ訳を参照せざるをえなくなったという意味では、ナボコフ訳は一定の成果をあげたと言えるだろう。

さらにナボコフの『オネーギン』訳やその注釈は現在も翻訳研究だけでなくナボコフ研究やプーシキン研究の文脈でも俎上にあがり、議論されている。ナボコフが残した作品でかくも論争的なものは(そしてその論争が今でもむしかえされて真剣に議論されるの

は)、『ロリータ』をにおいてほかにない。あるインタビューでナボコフは「私は『ロリータ』と『エヴゲーニイ・オネーギン』についての作品において人々に記憶され、思い出されることになるだろう」と述べた(Nabokov 1990: 106)。没後 35 年、その言葉は正しかったといえるだろう。

¹ この訳注については京都大学の「翻訳の諸相」研究会が研究対象とし、その成果をまとめていて参考になる。「『翻訳』の諸相」研究会編(2007)およびウェブサイトを参照のこと。

² ただし、比較的近年の英訳 Pushikin(2008) Pushikin(2011)は散文訳である。どちらもロシア語原文と英訳との並列という形をとっており、散文訳がゆるされるためには対訳という形式が必要だったのではないかと思わせる。また前者は、訳文のかなりの部分をナボコフ訳を許諾の上二次使用しており、オリジナリティという意味で疑問が残る。

³ このような翻訳と注釈の「二重構造」を指摘したのはエスキンである(Eskin 1994: 17)。

⁴ 『オネーギン』訳の“literalism”と自己翻訳、創作の関係は(秋草 2011)も参照。

⁵ この論争については(Diment, 2002)も参照。

⁶ ナボコフの著した翻訳についてのエッセイで、「翻訳をめぐる問題」以外で主なものとしては“The Art of Translation”(1941)や“The Servile Path”(1959)などをあげることができる(ただし英語に限る)。

※本論文は 2012 年 3 月 25 日に立教大学でおこなった日本通訳翻訳学会「翻訳研究育成プロジェクト」での講演をもとに改稿したものである。

.....

【著者紹介】

秋草俊一郎 (AKIKUSA Shun'ichiro) 東京大学大学院博士課程修了。博士(文学)。ウィスコンシン大学マディソン校名誉客員研究員(2009~2010 年)。専攻は英米文学、ロシア文学、比較文学、現代文芸論など。東京大学総長大賞(2008 年度)を受賞。

.....

【参考文献】

- Arndt, W. (1964). Goadng the Pony. *The New York Review of Books*, 30 April: 16
- Arndt, W. (Ed.). (1993). *Pushkin Threefold: Narrative, Lyric, Polemic, and Ribald Verse*. Ann Arbor: Ardis.
- Boyd, B. (1991). *Vladimir Nabokov: The American Years*. Princeton: Princeton University Press.
- Burgess, A. (1965). Pushkin & Kinbote. *Encounter*, 24: 74.
- Conquest, R. (1965). Nabokov's *Eugene Onegin*. *Poetry*, 106 (3): 236-238.
- Daniel W. & Astradur E. (Eds.) (2006). *Translation—Theory and Practice: A Historical Reader*. Oxford University Press.
- Deutsch, B. (1965). Nabokov v. Deutsch. *New Statesman*, 9 April: 571.

- Diment, G. (2002). The Nabokov-Wilson Debate. D. H. J. Larmour. (Ed.). *Discourse and Ideology in Nabokov's Prose*. London: Routledge: 15-23.
- Eskin, M. (1994). *Nabokov's Version von Puškins „Evgenij Onegin“: Zwischen Version und Fiktion – eine übersetzungs- und fiktionstheoretische Untersuchungs*. München: Verlag Otto Sanger.
- Gerschenkron, A. (1966). A Manufactured Monument? *Modern Philology*, 63 (4): 336-347.
- Hofstadter, D. R. (1997). *Le Ton Beau Marot: In Praise of the Music of Language*. New York: Basic Books.
- Leighton, L. G. (1991). *Two Worlds, One Art: Literary Translation in Russia and America*. Dekalb: Northern Illinois University Press.
- Muchnic, H. (1971). Russian Poetry and Method of Translation. *The World of Translation*. New York: Pen American Center: 297-305.
- Nabokov, D. (1979). Translating with Nabokov. G. Gibian and S. J. Parker (Eds.). *Vladimir Nabokov, His Life, His Work, His World: A Tribute*. London: Weidenfeld and Nicolson: 145-178.
- Nabokov, V. (1945) From Pushkin's "Eugene Onegin". *The Russian Review*, 4 (2) Spring: 38-39.
- Nabokov, V. (1959) The Servile Path. *On Translation*. Cambridge: Harvard University Press: 97-110.
- Nabokov, V. (1965). Pushkin v. Deutsch. *New Statesman*, 23 April: 642.
- Nabokov, V. (1981). The Art of Translation. F. Bowers (Eds.). *Lectures on Russian Literature*. New York: Harcourt: 315-321.
- Nabokov, V. (1989a). The Art of Translation. *Invitation to a Beheading*. New York: Vintage International.
- Nabokov, V. (1989b). *Vladimir Nabokov: Selected Letters, 1940-1977*. New York: Harcourt Brace Jovanovich/Bruccoli Clark.
- Nabokov, V. (1990). *Strong Opinions*. New York: Vintage International.
- Nabokov, V. (1992). Problems of Translation: *Onegin* in English. R. Schulte and J. Biguenet (Eds.). *Theories of Translation: An Anthology of Essays from Dryden to Derrida*. Chicago: University of Chicago P, 1992: 127-143. (Original work published 1955)
- Nabokov, V. (2001). *Dear Bunny, Dear Volodya: The Nabokov--Wilson Letters 1940-1971 Revised and Expanded Edition*. Berkeley: University of California Press.
- Pushkin, A. (1943). *Eugene Onegin: A Novel in Verse*. (B. Deutsch, Trans.). Mineola: Dover Publications, INC.
- Pushkin, A. (1964). *Eugene Onegin: A Novel in Verse*. 4 volumes. (V. Nabokov, Trans.). New York: The Bollingen Foundation.
- Pushkin, A. (1975). *Eugene Onegin: A Novel in Verse*. 4 volumes. (V. Nabokov, Trans.). Princeton: Princeton University Press.
- Pushkin, A. (1979). *Eugene Onegin: A Novel in Verse, Revised Edition*. (C. Johnston, Trans.). London: Penguin Books.
- Pushkin, A. (1990). *Eugene Onegin: A Novel in Verse*. (J. E. Falen, Trans.). New York: Oxford University Press.

- Pushkin, A. (1999). *Eugene Onegin: A Novel in Verse*. (D. R. Hofstadter, Trans.). New York: Basic Books.
- Pushkin, A. (2002). *Eugene Onegin: A Novel in Verse, Second Edition, Revised*. (W. Arndt, Trans.). New York: Ardis.
- Pushkin, A. (2008). *Eugene Onegin: A Novel in Verse*. (H. M. Hoyt, Trans.). Indianapolis: Dog Ear Publishing.
- Pushkin, A. (2011). *Eugene Onegin: A Novel in Verse*. (R. Clarke, Trans.). London: Oneworld Classics.
- Rosen, N. (1968). Variation on a Russian Verse. *The Saturday Review*, 28 November: 25-26.
- Rosengrant, J. (1994). Nabokov, *Onegin*, and the Theory of Translation. *Slavic and East European Journal*, 38 (1): 13-27.
- Shaw, J. T. (1965). Translation of *Onegin*. *The Russian Review*, 24 (1): 111-127.
- Simmons, E. J. (1964). A Nabokov Guide through the World of Alexander Pushkin. *The New York Times Book Review*, 28: 4-5.
- Wain, J. (1965). Poet and Doppelgänger. *The Listener*, 29 April: 627-629.
- Venuti, L. (Eds.). (2000). *The Translation Studies Reader*. London/New York: Routledge.
- Тарви, Л. (1999). Пушкин и Набоков: Из опыта по клонированию онегинской строки на английском. *А. С. Пушкин и В.В. Набоков: сборник докладов Международной конференции, 15-18 апреля 1999 г.* Санкт-Петербург: Дорн: 297-313.
- Пушкин, А. С. (1975). *Собрание сочинений в десяти томах: том четвертый*. М.: Художественная литература.
- Фридберг, М. (1964). «Евгений Онегин» в переводе Набокова. *Новый журнал* 77: 297-300.
- 秋草俊一郎(2011)『ナボコフ 訳すのは「私」 : 自己翻訳がひらくテキスト』東京大学出版会
- エドモンド・ウィルソン/佐々木徹訳(2005)「プーシキンとナボコフの奇妙な事例」『エドモンド・ウィルソン批評集 2 文学』みすず書房: 265-299 [原書: Wilson, E. (1972). *The Strange Case of Pushkin and Nabokov. A Window on Russia*. New York: Farrar, Straus and Giroux: 209-237.]
- ジョージ・スタイナー/亀山健吉訳(2009)『バベルの後に: 言葉と翻訳の諸相(下)』法政大学出版会 [原書: Steiner, G. (1998). *After Babel: Aspects of Language and Translation Third Edition*. New York: Oxford University Press.]
- デイヴィッド・ダムロッシュ/秋草俊一郎、奥彩子、小松真帆、桐山大介、平塚隼介、山辺弦訳(2011)『世界文学とは何か?』国書刊行会 [原書: Damrosch, D. (2003). *What Is World Literature?* Princeton: Princeton University Press.]
- 「『翻訳』の諸相」研究会編(2007)『「ナボコフ訳注『エヴゲーニイ・オネーギン』」注解』京都大学大学院文学研究科
- 「翻訳の諸相 第一研究班」[Online] <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/trans/sub1.html> (2012年4月1日)